

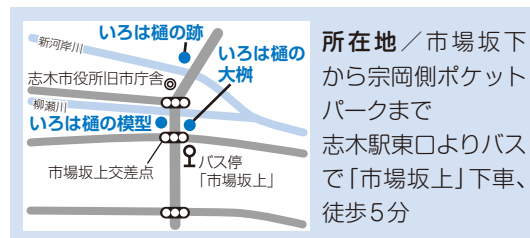
郷土を知り、郷土を愛する

志木市 歴史 むんぽ

— 執筆・協力 志木のまち案内人の会 —

第2回 いろは樋 (百間樋) の跡

の「いろは樋」
▶ 明治30年（1897）頃



所在地／市場坂下から宗岡側ポケットパークまで
志木駅東口よりバスで「市場坂上」下車、徒歩5分

「いろは樋」とは、承応4年（1655）春に完成した野火止用水（伊豆殿堀）を引又（現志木市本町）から宗岡へ引くために作られた掛樋です。野火止用水開通後、むなしく新河岸川に落ちていたその流末を、当時、灌漑用水に困っていた宗岡地区に活用したいと考えた旗本岡部氏の家臣・白井武左衛門は、宗岡地区の一部を領有していた川越藩主松平信綱の許しを得て、寛文2年（1662）舟運の船が走る新河岸川の上に、長さ約260m、幅と深さ各約45cmの木樋を、水面から約4～5mの高さに架けました。これにより、宗岡地区の水田は充分潤い、収穫量も格段に増加しました。

この掛樋は、樋が48個繋ぎであったため、48文字からなる伊呂波仮名にちなんで、「いろは樋」と呼ばれました。

江戸時代、修理を繰り返しながら使ってきた木製の「いろは樋」も、修理に使う杉材が入手困難になり、さらに明治30年代にはレンガや鉄管などを使用できるようにもなり、川の下に埋設することにしました。

その後も再改修が行われましたが、現在、レンガ積みで改造された大樋が、水を送り出す側の市場坂上と水を受ける側の宗岡側ポケットパークに、志木市の貴重な文化財としての姿を残しています。



行政サービスのデジタル化に向けて

国においては、菅政権が発足し、マイナンバーカード普及の推進や行政手続きのオンライン化などを目指したデジタル庁の創設が打ち出されました。また、IoTやAI・ビッグデータなどを活用し、自治体の課題解決を図る「スマートシティ構想」や、交通、防災、教育、医療・介護など、さまざまな分野のデータを横断的に活用し、新たな行政サービスの展開を図るダイナミックな「スーパーシティ構想」の検討も進められています。

市役所においても「新しい生活様式」への対応は待たなしの状況であり、現在、その取組の一つとして、「市役所に行かなくていい仕組みづくり」と銘打ち、行政手続きのインターネット申請をはじめとするICTの活用に向け、職員一人ひとりが知恵を出し合っているところです。

具体的には、4月からICT戦略室を新たに組織し、市民の皆さまの利便性の向上や事務の効率化といった視点から、ICTを活用した新たなサービスの実現に取り組

んでいます。実証実験の段階ではありますが、粗大ゴミの回収申込みや新生児子育て応援金の申請などができる「LINEを活用した電子申請」や、皆さまの問合せに24時間AIが回答する「AIスタッフ総合案内サービス」など、具体的な成果も見えています。今後においては、マイナンバーカードを活用し、スマートフォンから住民票の写しなどを請求できる「スマート申請」の実施に加え、窓口で発行する住民票の写しや戸籍証明書などの手数料の支払いにキャッシュレス決済を導入することも視野に入れています。

一方で、行政のデジタル化に向けた取組は、発展途上の段階でもあります。先日、東京証券取引所がシステム障害により、終日すべての株式売買を停止したという報道や、NTTドコモの「ドコモ口座」を不正利用して他人の預金口座からお金を引き出すといった事件などもありましたが、こうした脆弱性への対応も大きな課題です。

今後、行政のデジタル化については、その利便性とリスクのバランスをとりながら推進する必要がありますが、市役所のサービスが手のひらの中で完結できる時代が間違いなくやってきます。

いかなるサービスにICTを活用すべきか……。地域コミュニティ活動など、人と人との「つながり」や、「温もり」は消し去ってはならないということも頭に、着実に、大胆に歩みを進めていきたいと考えています。